

フィリピンスタディツアーにおける潜在的教育機会の探求

楠 美 順 理

1. はじめに

中京大学国際教養学部のパルコヴィッツゼミと楠美ゼミ共同で、希望者を募り、フィリピンでのスタディツアーを実施した。このスタディツアーは国際協力を念頭に置いたもので、ある程度の教育目的は想定していた。ただし、ツアーが及ぼす教育効果が参加者の背景や関心他によって様々であり得ること、少なくとも筆者がスタディツアーを企画したのが初めてであること、何よりツアーの体験から気づきを生むことを大まかな目標とすることから、どのような教育機会に遭遇できるかについては未知の部分があった。想定した教育機会の検証を含めた、潜在的教育機会の探求を、参加者へのアンケート調査・聞き取り調査を交えて行うことを本稿の目的とする。これは、様々な形で設計可能なツアーが、意図的にまたは結果的にもたらしうる教育効果にどのようなものがあるかを明らかにしようとするものであり、今後のスタディツアーの設計に寄与しようとするものでもある。

以下では、第一にツアー全体の概要を紹介し、第二にツアーの主要な要素の内容やそれらが含む潜在的な教育機会について論じ、第三にアンケート結果を示し、第四にツアーにおける潜在的教育機会の有無について総合的に考察する。

2. スタディツアー全体の概要

ツアー参加者は国際教養学部2年の女子6名で、同行したのは教員2名であった。海外旅行経験の多い学生がいる一方で海外渡航が初めてという学生もいた。ただ、途上国に貧困等の実態を学びに行くという趣旨のツアーに参加するのは全員が初めてであった。企画自体が他の教員との共同であったという事情や自由度を持たせたいという趣旨からは、参加者には多様で自由な学習機会となればよいという面もあったが、少なくとも筆者にとってのツアーの大まかな目的は、映像や教科書からは実感を持ってない途上国の現状を直接見聞きし、問題意識を醸成するという点に

あった。それ以上に掘り下げたり、具体的な調査をしたりすることは想定していなかった。

日本からマニラ空港に到着した時から、マニラ空港から日本に向けて出国する時まで、移動手段、滞在先の確保、訪問先との調整等の役割をフィリピンの NGO である Health and Development For All Foundation, Inc (HADFAFI, ハドファフィ) に委託した。マニラでのパヤタス (Payatas) 地区訪問のマネジメントを、日本の NGO である INTERNATIONAL CHILDREN'S ACTION NETWORK (ICAN, アイキャン) に委託した。セントフリアナ (St. Juliana) でのオドネル (O'Donnell) 高等学校訪問は、相手方の高校の協力を得て行った。飛行機のチケットとマニラでのホテルの予約は参加者と教員自身で行った。

ツアー先がどのようなところか、カウンターパートの HADFAFI やオドネル高等学校がどのような組織で、どのようなスタッフが対応してくれるかといったことは、前年度に教員2名で下見に行き概要を把握しておいた。ICAN は本部が名古屋市にあるため、名古屋の事務所です事前に打ち合わせをした。

ツアーの時期は、時間の取れる夏休みと春休みから春休みを選んだ。夏休みが学部の秋学期留学前であることと、フィリピンの気候が良くなく洪水や台風が多発するために避けたかったことからこの様にした。

ツアーの内容は、当初12名であった参加希望者と各教員の希望を合わせ、実現可能性をそれぞれのカウンターパートと調整した上で、教員が中心になって最終調整・決定した。飛行機チケット代が9日以上滞在で高額になることを考慮し、8日に留めたが、希望した内容のうち断念した要素はほぼ無い形にすることができた。最終的な内容は筆者の意向だけによって決められたものではないため、一部の概要紹介は本論では省略する。

旅程の概要を表1に示す。

表1 フィリピンスタディツアー2015の旅程の概要

日にち	活動内容	場所	カウンターパート
2016/2/20 (土)	移動, HADFAFI スタッフとの顔合わせ	名古屋→マニラ	HADFAFI
2016/2/21 (日)	オリエンテーション	マニラ	HADFAFI
2016/2/22 (月)	パヤタス訪問, 移動	マニラ→セントフリアナ	ICAN/HADFAFI
2016/2/23 (火)	オドネル高等学校との文化交流及びワークショップ	セントフリアナ	オドネル高等学校 / HADFAFI
2016/2/24 (水)	HADFAFI の地域活動理解 (周辺集落訪問)	セントフリアナ	HADFAFI
2016/2/25 (木)	アエタ (Aeta) 族の村でのホームステイ	セントフリアナ→ブラカン村 (Sitio Bulakan)	HADFAFI
2016/2/26 (金)	同上, バタアン戦争慰霊碑訪問, HADFAFI スタッフとの振り返り	ブラカン村→セントフリアナ	HADFAFI
2016/2/27 (土)	移動	セントフリアナ→マニラ→名古屋	HADFAFI

3. ツアーの主要な要素の内容と含まれる潜在的な教育機会

ツアーの要素のうち、事前に教育機会の想定できた要素を中心に、主要な要素の内容を概観する。その上で、それらが含む潜在的な教育機会の有無について論じる。

3.1 バヤタス訪問

スモークマウンテン (Smokey Mountain) と称されるフィリピンのゴミ山は貧困の象徴としてよく知られる。ゴミ山周辺の劣悪な環境に住み着き、ゴミ収集車が運び込むゴミから鉄やプラスチック等の廃品回収をする人々の生き方が途上国の貧困の象徴の一つとして扱われる。セルビアの同様の場所の訪問やエジプト他の状況についての見聞からは、フィリピンだけが特殊とは言えないが、日本では特にフィリピンの事例が知られる。フィリピンにも、いわゆるスモークマウンテンであるマニラ市北東のトンド地区や、スモークバレー (Smokey Valley) と称されるケソン (Quezon) 市北方のルパンパンガコ地区にあるバヤタス廃棄物処分場等がある。なお、スモークとはゴミから自然発火する煙に由来する呼び名である。

バヤタス訪問は、当然ながら、第一に廃棄物問題の理解に役立ちそうである。第二に、異なる生活様式、生活水準、価値観の理解にも役立ちそうである。このような機会はフィリピン滞在中の様々な場面で存在するが、バヤタスでは特定の方の家の中までの訪問



図1 バヤタスのゴミ山

機会があり、住民の方からわざわざ聞き取り調査をする機会があった。先進国の生活様式に近い富裕層ではなく生活様式が極端に異なる貧困層の生活様式の理解はより有意義と思われた。第三に、学生の将来の職業の選択肢の一つとしてのNGO理解の機会にも役立ちそうである。2章に記したようにバヤタス訪問のマネジメントはICANに依頼した。HADFAFIと違い、ICANは日本のNGOであり、日本の本部には中京大学卒業生が勤務している事情もあるため、日本人のNGO職員の活躍を身近なものとして感じられそうであった。

3.1 (1) 廃棄物問題理解の機会としての側面

こうした地区を訪れば、問題の凄まじさがよくわかる。第一に悪臭がものすごい。かつてセ

ルビアのこうした地区を訪れた後、筆者の服についた臭いはドライクリーニングにかけても数週間続いた程であった。第二に、ゴミ自体の量が凄まじい。分別されていない大きな家具から生ゴミまで様々なものがメチャクチャに捨ててある。稀には人体の一部や新生児の死体すらあると聞く。現在は立ち入りはできないそうだが、筆者がかつて訪れた時には、例えば犬の死骸は簡単に目についた。

国によらず、本来、ゴミ捨て場は人間が住むことを想定していない場所である。である以上、人間が住んだり仕事をしたりするのに劣悪な環境であることはいわば当然のことである。つまり、そこに人が住まないように、住めないようにすれば解決は簡単かもしれない。しかし、そのような地区に住み着くことが貧困状態のためにやむなく望まれるという側面がある。一方で、現地を訪れると、小型ゲーム機、テレビ、オートバイ等の安価とは言えないものを所有している家庭は案外ある。後述する農村部に比べ現金収入が多いことを考慮すると、貧困のためにそのような場所に住まざるを得ないという側面もある。このように、ゴミ山に住む人々およびその地域は貧困問題の象徴としてインパクトのあるわかりやすそうな事例ではあるが、最優先の対策を立てるために問題の本質を探ろうとしても簡単ではない。

そもそも、日本に関してであっても、廃棄物問題というもののそのものの本質的な理解は簡単ではない。名古屋市がかつて「ごみ非常事態宣言」を出した時の直接の原因は、埋め立て場不足であった。埋め立て量が多く、かつ増加していること、埋め立て場の候補地が限られていることから、埋め立て場が不足するという事は数十年前から予測されていた。名古屋ではそれが現実になり、「宣言」まで出さざるを得ない状況になったと言える。この文脈から、廃棄物問題の本質－ないし最も深刻な具体的問題－は埋め立て場不足であるという解釈は少なくない。ただ、名古屋市においては、その後、当面の埋め立て場が確保され、現在の名古屋市の若い世代にはかつて「ごみ非常事態宣言」が出されたことすら知らない人が多い。「ごみ非常事態宣言」が出されたのも、たまたま事態が逼迫しただけであり、大きな注目を集めたのもその事情に過ぎないとも言える。問題は場所の確保の困難性自体にあり、例えば健康被害が生じたことも、そうなることが心配されたこともない。

いわゆる「廃棄物問題」で具体的に何が最も深刻かと問えば大気、水質、土壌の汚染であるという考え方もある。フィリピンのゴミ山で暮らす人にとってはまさにこのことは深刻である。しかし、現在の日本においては、廃棄物処理場で環境基準を守るような処理がされ、処分場に埋め立てられる。少なくとも廃棄物行政の大枠においては、環境基準を守るような仕組みが整備されていると言える。いわゆる埋め立て場から漏れ出る汚染物質の影響を心配する声は、現在の日本ではとても大きいとは言えない。つまり、汚染源としての「廃棄物問題」は、現在の日本においては急を要する深刻な問題とは言えない。

「廃棄物問題」がもたらす最も深刻な問題は、資源・エネルギー問題だというのが筆者の見解

である。「廃棄物問題」は大量廃棄がもたらすものである。大量廃棄は大量消費が、大量消費は大量生産がもたらすものである。大量生産には資源・エネルギーが必要である。再生可能資源は再生でき、枯渇性資源はある程度リサイクルが可能であるが、利用可能な資源に限られることは「成長の限界」が教えている通りである。大量生産・大量消費を前提とした大量リサイクル社会ではなく、環境負荷の少ない循環型社会こそが目指すべき社会像であるというのが筆者の見解であり、循環型社会形成推進基本法の理念であり、現在の日本の方針でもある。

大量廃棄をもたらす大量生産と大量消費を見直すことに、上で見てきた埋め立て場不足や汚染や資源・エネルギー問題を含む「廃棄物問題」全般の解決の方向性がある。「廃棄物問題」は、いわば「資源・エネルギー問題」とコインの表裏のような関係にある。「資源・エネルギー問題」はグローバルに長期的に捉えなければ認識しづらいが、「廃棄物問題」は比較的身近である。「廃棄物問題」から始めて、こうした問題にまで目を向けられたら望ましい。仮に汚染処理が完全にされており、埋め立て場が確保されていても、大量廃棄が「資源・エネルギー問題」を深刻化するという事に気づくことは重要である。

「廃棄物問題」がどのような問題群を含み、その中で特に何が重要かということはこのように十分複雑で難解である。環境省や筆者の立場は横においても、こうしたことを深く考える機会が普段の日本にはない中で、凄まじいゴミとその中で暮らす人々と接するパヤタス訪問は、人に「廃棄物問題」の解決・本質等を考えさせるものである。後述するワークショップの開催と併せて、廃棄物問題理解の機会があることがこのように想定できた。



図2 セルビアのゴミ山と

長く臭いの取れなかった筆者の服

実際の訪問では、あまり不潔な環境に身をおいたことの無いと想像される女子学生が、凄まじい悪臭とゴミの山、そしてそこで生活する人々を前にただ言葉を無くしていた。落ち着いてからは「百聞は一見に如かずというのはこのことだ」と複数名が言っていた。より具体的には「このような光景は映像では何度か見たことがあったが、やはり直接見るとインパクトが違う」、「映像で見て理解していても『ふ〜ん』くらいの感覚であるが、現場を見たらそういう感覚ではられない」という感想を聞いた。現場を見てもらうことは意義が大きいと想像していたが、想像以上の教育効果があった印象を受けた。

3.1 (2) 異なる生活様式、生活水準、価値観理解の機会としての側面

マクロな視点から、国際協力の内容を検討したり、持続可能な発展の具体像を検討したりする

にあたっては、社会の豊かさや望ましい発展の方向性を理解することが重要である。単なる経済成長に基づく発展の方向性だけにこだわらずに、どのような発展の方向性が当該社会に相応しいか、豊かで持続可能な発展はどのようなものかを追求することが重要である。これらは、個人の効用、満足度、幸せが何で得られるかということにまで関係する。

では、個人の効用、満足度、幸せは何で得られるだろうか。最近の若い世代からはスマホ無しの生活は考えられないという言葉聞く。若い世代に限らなくても、例えば、電気・水道・ガスの無い生活がどれだけ厳しいものなのか実は十分快適なものなのか、苦しいのか楽しいのかといった感覚は経験しなければ判断し難い。また、核家族化が進んでいるのは日本で極端であり、途上国を中心とした他国ではあまりそうではない。家族を超え、村社会での人々とのつながりが濃厚な文化もある。

こうした観点から、今回は、フィリピンの人々が何を求め、何で幸せを感じているかということに少しでも肉薄したい。フィリピンでの家族やコミュニティの人との人間関係やそれにまつわる価値観を少しでも理解し、望ましい生活水準や、経済成長の（不）必要性を理解するために、まずはフィリピン人のライフスタイルを理解することとした。

フィリピンの人々のライフスタイルと言っても、特にフィリピンでは貧富の差が大きく世帯ごとの差が大きい。貧困層の例の一つとして、まずは象徴的な、パヤタスのゴミ山周辺の住民の家庭を訪問した。また、後述するようにアエタ族の村へのホームステイの機会を設けた。アエタ族は汚染には苦しんでいないが、経済学的に捉えればパヤタスの住民以下の生活をしているため、貧困層のもう一つの例として適切と思われたためである。



図3 パヤタスのとある家の中

3.1 (3) NGO 活動や NGO 職の理解の機会としての側面

前述した様に、パヤタス訪問のマネジメントは日本の NGO である ICAN に依頼した。現地での案内を担当してくれた方は優秀でタガログ語の堪能な日本人スタッフであった。この人物との関わりが、NGO 活動や NGO 職の理解にはとてもよい機会であったと捉えている。

空港への出迎え他全般のマネジメントを担当してくれたのは HADFAFI という NGO の職員やボランティアで、フィリピンの人であった。会話は基本的に英語で行われた。相手方の性格・雰囲気にも拠ったが、英語に難のあった学生はあまり会話をしていなかった。英語はある程度通じたものの、第一に双方が英語のネイティブスピーカーではなかったため、第二にセンスの違いに由来

する問題もあったために通じない側面もあった。

こうしたコミュニケーション面だけではなく、対応してくれた NGO 職員やボランティアが日本人ではないため、何より職業人としてのイメージが無かった。日本では大学の職員、バスの運転手、ホテルのフロントスタッフ等に、ある程度のイメージや役割に応じた雰囲気がある。こうした職業人ごとのイメージは特に日本では相対的に強い。フィリピンのバスの運転手やホテルのフロントのスタッフと接するときは、日本の同種の職業



図4 フィリピンで出会った日本人の NGO 職員との振り返りの場

業人の印象との同質性以上に、日本人とフィリピン人の違いが目につく。更に、職業人の枠に収まらないフィリピン人の自由な気質も、NGO というものの社会的な立ち位置が日本とフィリピンでは異なること等も手伝って、フィリピンの NGO 職員と接しても、「NGO 職員」という職業人としての印象はさほど受けなかった。これに対して、日本人の NGO 職員の場合は、それが単に日本人であるというだけで、接したことのある各種職業人とは異なる「NGO 職員」という印象を持たた。少なくとも筆者にはそういう印象が強かった。

加えて、この ICAN スタッフのマネジメントは、全般にとっても極め細かで、正確で、配慮に満ちたものでありながら、同時に必要な部分では厳しいものであった。その優秀さ・的確さには我々一同が舌を巻いた。訪問の最後の振り返りミーティングの場では、訪問の意義を強く感じてこのスタッフも我々の多くも涙した程であった。そうした面も含めて、このスタッフに対する我々の尊敬の念はとても強かった。このスタッフが女性であり、参加学生が全員女性であったことも手伝い、将来の理想の人間像の一人とも映ったようである。

国際協力に関心のある学生には、就職の選択肢として NGO 職員を挙げる人が少なくない。一方で、普段の日本の生活で NGO や NGO 職員に接する機会は多くはない。特に海外で活躍している NGO 職員に接し、その仕事内容を理解する機会は通常はない。こうした中で、フィリピンという海外の地で、日本人の NGO 職員と出会い、その仕事内容や仕事ぶりの一端に接したことは、想定外の大きな学習機会となった。

3.2 オドネル高等学校との文化交流及びワークショップ

受け入れ団体である HADFAFI のセントフリアナ事務所のすぐ近くに、オドネル高等学校（日本の中学1年～高校1年の4年間の学校に相当）がある。事前訪問の段階でこの学校の教員と懇意になり、スタディツアーの際に、共同で何らかの教育活動をする約束をした。スタディツアーの企画段階では、フィリピンの教育に関心のあった学生がいたため、教育制度や教育現場の実態

の差異を理解する機会を設ける方向で企画を進めた。また、他の参加教員やオドネル高等学校の教員の希望から文化交流の機会とすることも決まった。その後、フィリピンの教育に関心のあった学生が参加を取りやめたため、「何らかの共同の教育活動」の中身を再検討し、結果的にはワークショップを開催することとなった。

オドネル高等学校と連携したことで様々な教育機会が得られたと捉えている。第一に、「何らかの共同の教育活動」の中身の検討自体が、結果的に援助のあり方理解の機会となった。第二に、この中身自体やそのための準備が、結果的に廃棄物問題理解の機会となった。第三に、そもそも予定していた通り、高校の訪問自体が文化交流の機会となった。そして第四に、想定した通り、高校の教員や生徒と濃密に関わることが英語によるコミュニケーションの機会となった。以下、ワークショップの開催の経緯を概説した上で、以上の4つの教育機会について順次概説する。

3.2 (1) ワークショップの共同開催の経緯

ワークショップの開催という案は、オドネル高等学校との共同の教育活動の中身を検討する中で半ば偶発的に生まれたことであった。それは出発の一ヶ月前に高校側から提案された resikglobo というものの購入・作成案がもたらしたものであった。

具体的な活動の案を日本側とフィリピン側が出し合っていた段階で、フィリピン側からこの resikglobo というリサイクル用の回収箱を共同で作成・設置したいという案が出てきた。resikglobo というものは、作成セットが規格品として販売されているようなもので、購入後の工作プロセスを必要としたものであった。この購入費用の負担と工作プロセスがツアーの案の一部として提案されたということである。

我々のツアー費用の案は、具体的な活動内容の必要性と、活動に伴うモノや手間の必要性に応じて算出されていた。その案を作成した HADFAFI の担当者は、連携していたオドネル高等学校の担当者から必要な費用項目を聞き、計上していた。その予算案に resikglobo 購入費用が計上されていた。安価なものではなかったために、負担するかどうかを参加予定の学生と教員で話し合うというプロセスが必要になった。

賛否をめぐっては意見が分かれ、それぞれから様々な指摘があった。否定的な立場からは、資源回収用容器としては例えば単なる段ボール箱で十分なのではないかという疑問、特に学生がポケットマネーから負担するツアー参加費用にカウンターパート側が云わば援助を求めていることへの疑問、そのような形になりながらも援助要請は明示的ではなくこの機会を利用されるような形になっていることへの疑問が挙げられ、援助をせずに対等な関係であることが重要であるまたは援助するにしてもこのような仕方は問題であるという主張がされた。一方で、肯定的な立場からは、resikglobo の購入を拒否すればオドネル高等学校訪問が心理的に難しくなることを心配する事情、相手方に歓迎される様な「何らかの共同の教育活動」となる他の具体案の提案が難しい

という事情等が挙げられ、ツアーのサポートをしてくれる HADFAFI(とオドネル高等学校)が善意で協力してくれることに敬意を表して計上される費用の詳細にはできない限り口を出すべきではないという主張、ツアー費用は手間賃を含めて計上されているのだから相手方が必要



図5 ワークショップの様子

としているものにこそ支払いをしようという主張、そもそも国際協力(つまりは援助)を標榜しているのだからある程度そのような貢献をしようという主張がされた。

当初、この resikglobo というものはどのような物で、どう必要なかがわからないということが我々の一部を当惑させた。どうやらフィリピンが国レベルで推進しているリサイクル活動に必要なものらしいことは後にわかった。そのため、段ボール箱は不適切であり、規格品を購入せざるを得ないことはおおよそ理解された。ただ、メールのやり取りがあまり機能しなかったため、こうした事情は他の教員が調査して、おぼろげながらわかってきたことであった。メールのやり取りに障害があったのは、第一に相手方の職場に LAN がなくかつ Wifi が不安定であったこと、第二にお金に絡む繊細な話題であったためにコミュニケーション自体が難しかったこと、第三にコミュニケーションセンスの違いからこうした話し合いをすること自体が難しかったことが挙げられる。こうした事情からフィリピン側とのコミュニケーションを深めて判断することは難しかった。

この様な状況下でも、resikglobo の費用負担をするかどうかは早い段階で確定させる必要があった。それは、まず、我々の訪問時の resikglobo の共同での工作を相手方が予定し、事前に製品の予約をしたかったという事情があったためである。そして、この点を確定させなければ我々の HADFAFI に対する支払額が確定できなかったという事情もあった。また、「何らかの共同の教育活動」の中身を、早い段階で確定させたいという事情もあった。更に、resikglobo の購入案が初めて示されたのが1月になってからであり、出発までに一ヶ月程度しかない中で、日本側参加者の8名と高校の担当者、HADFAFI の担当者と調整することに時間が足りないという事情もあった。

resikglobo の購入をどうするかについて話し合うミーティングは3、4回にわたり、かなり時間をかけても結論は得にくかった。それでも時間制約等の都合を考慮し一定の結論を出した。それが、resikglobo の必要性自体を問う形でワークショップを開催しようというものであった。ただ

し、ワークショップの内容を検討する段階で、「援助」されるフィリピン側の生徒に配慮し、「援助」という側面を取り上げることをやめた。結果、ワークショップは、廃棄物問題理解という点に焦点を絞ったものへと昇華された。

ワークショップ実施のための事前の調整は時間的に難しく時間枠を定めた程度であった。結果的には、廃棄物問題への理解をし合って、リサイクルの必要性を訴えあい、resikgloboを有効に活用しようというような、単なる廃棄物問題理解のためのワークショップという形に留めた。resikgloboの必要性について話しあうのをとりやめたことは、それを強く希望した参加者がいなかった事情にも対応している。一方で、そこまでの過程自体が援助のドナーとしての振舞い方を理解する機会になったと捉えられた。

3.2 (2) 援助のドナーとしての振舞い方理解の機会としての側面

ワークショップ開催を結果的にもたらした、resikgloboの購入費用を負担するか否か、それを暗に希望してきた相手方にどう対応するかということについての議論は、想定外に発生した楽しくない議論ではあったが、援助のドナーとしての振舞い方についてのとてもよい学習機会となった。

具体的には、「resikgloboの必要性を明示してもらい、納得できたら費用を負担する」という趣旨を相手方に伝えたい場面があった。この場面では、こちら側の中で、この発想がそもそも上から目線にあたるからそのような伝達を避けるべきとする意見とやむを得ないとする意見の二つがあり、交渉の方針は定まらなかった。ドナーとしての振舞い方について正解の無い中で、学生がこの議論に参加したことは、その望ましいあり方を考察するよい学習機会となったと筆者は捉えている。

なお、「援助」は、上から目線の表現に聞こえるため、最近是对等なニュアンスである「国際協力」と呼ぶのが一般的である。広義の「国際協力」は、国際的事項に関する諸国家間の協力全般を指すが、狭義の「国際協力」は、先進国等の組織や個人が途上国等の組織や個人に対して行う経済的・技術的な援助のことを指している。

3.2 (3) 廃棄物問題理解の機会としての側面

このワークショップの開催は、3.1に記したパヤタス訪問とも相まって廃棄物問題理解にはと



図6 設置された resikglobo

でもよい機会となった。

参加した学生の一部は、環境分野が専門の筆者のゼミ生ではあったものの、事前から環境問題に強い関心があった訳ではなく、環境問題、廃棄物問題に関する理解の程度は標準的であった。参加学生はこの様に廃棄物問題に関する知識を事前に特別に持ち合わせていた訳ではなかったが、ワークショップの開催という案を具体化する段階から、廃棄物問題理解に対する関心が高まっていった。

ワークショップでは、双方の学生が廃棄物問題に関するプレゼンテーションをすることとなった。プレゼンテーションのためには、発表内容に関連する学習・調査、発表資料・発表原稿の作成、発表の練習が行われた。こうした作業が明確に必要になり始めたのは出発の2週間ほど前からで、最終的には発表前夜にセントフリアナの宿舎で深夜まで資料の作成や発表の準備をした。こうした作業や廃棄物問題についての専門的な理解や英語校正について教員からのサポートはあったものの、作業手順の決定や役割分担からそれぞれの役割の実行までは学生が主体的に行った。ツアー参加志望段階では廃棄物問題に特別関心の高かった訳ではなかった学生が廃棄物問題を主体的に学んだという意味では、このツアーの意義は極めて大きかったと筆者は捉えている。深夜まで学生がフィリピンの宿舎でワークショップの準備をしていた光景は、教育するものとして感動的な場面であった。

3.2 (4) 文化交流、異なる生活様式や価値観理解の機会としての側面

オドネル高等学校との文化交流及びワークショップという機会は大変有意義なものであった。文化交流では、双方の遊びを紹介・実演した上で、フィリピン側の寸劇や踊りを鑑賞させてもらい、ブードルファイトと呼ばれる食事をした。寸劇の一つはフィリピンでの恋愛から求婚までのあり方を紹介するものであった。そうしたことを学校が教育の場で教えているということや、寸劇や踊りを斜に構えずに素直に行うフィリピンの生徒の姿が印象的で、日本との違いを感じた。また、寸劇ではフィリピンにおいての家や村への個人の所属のあり方が示されており、現代の日本の価値観とかなり異なる価値観が日本の学生に示されていた。食事は相手方の生徒が中心になって薪を使って調理し、多くの料理が振舞われた。ブードルファイトというのは、バナナの葉を線状に長く（今回は10メートル程度）並べ、その上に多くの料理を載せたものを、手で直接、争う様にして食すもので、皆が楽しんでた。更に、年代は異なったもののフィリピンの生徒と濃く関わる機会となったことが、異なる生活様式や価



図7 ブードルファイトの様子

値観等に触れる機会ともなった。

3.2 (5) コミュニケーションと英語利用の機会としての側面

プレゼンテーションの言語は必然的に英語となった。母語でない言語でのプレゼンテーションという機会は単に伝えるだけでも困難を伴うため、内容や構成を考え、アピールのための様々な工夫をすることが重要であると、学生に理解してもらう自然な機会となった。

更に、文化交流の場面、ワークショップの場面全般で、学生はオドネル高等学校の教員や生徒と常に交流していたため、英語を含むコミュニケーション実践の重要な機会ともなった。



図8 オドネル高等学校との文化交流の様子

3.3 アエタ族の村でのホームステイ

フィリピンには多くの民族が住んでいる。そのうち、アエタ族というのはオーストラロイドに含まれる先住民で、マニラ市中で出会う平均的なフィリピン人と比べて肌の色が濃い目で、髪が縮れており、見た目にも違う民族である。フィリピン人の起源とも言われるが、差別されることもあるという複雑な立場にある。

このアエタ族の村は国内のあちこちに点在しており、セントフリアナ近郊の山にもいくつかある。その一つがブラカン村である。筆者らが一年前に事前訪問した村である。HADFAFIが支援している家庭が多くある村、つまりはHADFAFIと信頼関係がある村であり、支援の必要な貧困状態にある家庭の多い村である。現金収入は貧困ラインの1日1.9ドルを下回る家庭が少なくない。家は基本的に手作りでありドアが無い。電気はバッテリーからの利用で、大掛かりな充電は街まで出かけて行くという形態である。ガスは無く、煮炊きは薪で行う。食材は淡水魚やココナツを自給するものの、主食の米を主に外から購入するという形態である。トイレでは紙を使わない。



図9 ホームステイしたアエタ族の家と家族

使用言語は主にザンバル語で、英語はもちろん、タガログ語もあまり通じない。

このようなアエタ族の村への訪問は、異なる生活様式、生活水準、価値観理解の機会として重要だと事前の訪問の段階で捉えた。学生と相談の上、単なる訪問ではなく一泊二日のホームステイをすることとした。更に、環境教育の一環として、日本では簡単に行えない豚の屠殺見学による食育の機会を併せて設けることとした。

3.3 (1) 異なる生活様式、生活水準、価値観理解の機会としての側面

3.1 (2)に記したことと同じ趣旨で、アエタ族と交流することが、異なる生活様式、生活水準、価値観理解のための貴重な経験となることが予想された。パヤタスの人々とアエタ族を比較すると、パヤタスの人々は都会に住み、現金収入は多めである（1日1.9ドルの貧困ラインを下らない家庭が十分ある）ものの、劣悪な環境に住んでいる。一方で、アエタ族は山の村に住み、現金収入は貧困ラインを下回るほどであるものの、「劣悪な」環境に住んでいる訳ではない。人によっては快適には見えなかったかもしれないが、電気・水道・ガスの無い生活は女子学生にも意外に受け入れられた。キャンプやアウトドアライフのようなものと捉えれば物理的にさほど過酷ではなかった。食事がおいしく、踊り他のイベントで歓迎してくれた面もあるだろう。

アエタ族の生活理解はもちろん十分とは言えない。実際には一日一食しか食べられない時期があること、村による差が大きくブラカン村が比較的良好な状態にあること他の事情があるためである。それでも、スタディツアーに参加した学生には、ある程度の「異なる生活様式、生活水準、価値観理解」の機会にはなった。

3.3 (2) 豚の屠殺見学における食育の機会としての側面

飽食の時代と言われる今、国民全体、特に若い世代への食育は極めて重要である。

世界的には食糧危機が叫ばれている。現在については食料の供給量自体は需要量を上回っており、配分の仕組みさえ工夫すれば解決可能という説もある。この説が正しいか否かによらず、耕作可能地を拡大することの限界、単位面積当たりの収量増加の限界、人口爆発がより深刻になってきている状況に鑑み、近い将来に食糧問題が深刻化することは目に見えている。一方、国内では賞味期限内の食品が食品廃棄物として大量に廃棄されたり、豊作の際の出荷量調整のためにキャベツがブルドーザーでつぶされたりしていることもよく知られている。賞味期限切れ食品を食すことが必ずしも危険でないことを知らずにただ廃棄する人は少なくない。こうしたことから、目の前の食品を大切にすることの意味、世界的な食糧を大切にすることの必要性を、市民一人ひとりがしっかりと認識することは極めて重要である。

また、生物多様性の保全にあつては、生命中心主義的な立場から、動物の生命を大切にすべきという考えは以前にもまして強まってきている。一方で、人類の多くは肉食主義者ではなく、家

畜を育て、その命を奪い、肉食を続けている。そのよし悪しはさておき、このような一見矛盾するような事情をきちんと整理できている人は、私がこれまで見てきた学生には多くはない。分業化が進み、ほとんどの人が屠殺という場面に縁遠い現代の日本において、食肉加工品の原料が豚や牛といった生き物であることを知らない人すら若い世代にはいる。

屠殺現場を見、その肉を食すことで、まずはこのような一連の問題全般に思いを馳せ、系統的理解を深めることが重要と考えた。日本では無届けでの豚や牛の屠殺ができないため、それが簡単にできるフィリピンでこのような機会を併せ持ち、一連の認識や問題意識を醸成することを教育目的の一部とした。

実際の訪問にあっては、アエタ族の人々は屠殺の際の伝統的な舞を披露してくれた上で、屠殺から調理までを眼前で行ってくれた。屠殺の際には大声で泣いていた人をはじめ、ほとんどの学生が涙していたが、豚の丸焼きができあがってきた時のよい匂いには自然と反応し、食す段階では「豚さんへ感謝しよう」という言葉が自然に出てきていた。「世界の食糧問題」まで発展させる機会とはならなかったが、動物の命と引き換えに肉食が成立している現実の理解や、そうした食料を大切に思う思いが自然に醸成されたように思われた。



図10 屠殺された豚



図11 料理された豚

3.4 フィリピンの人との触れ合い全般における英語学習の機会としての側面

本学部の性質上、実践的な英語力習得へのニーズは高い。筆者は語学教育を担当していないが、この点に応えることもツアーの目的の一部とした。このため、スタディツアー中に自然発生する実践の機会を活用してもらうこととした。

そもそも、英語はフィリピン人の母語ではないものの公用語であり、かなり使われている言語である。国別の英語話者数ではウィキペディアで4位とされている程である。小学教育から英語教育があるだけでなく、マジョリティーの母語であるタガログ語での専門用語の不足やそれに伴う出版事情等から、多くの科目では英語で書かれた教科書が利用されている。つまり、フィリピンの人々は小学校からかなり英語に触れており、英語力は全般に高い。話すことに関しては、アジア人の特質からか、恥ずかしがる人が多く、英語を母語とする欧米諸国での英会話に比べ、

日本人は気後れせずに話しやすい面がある。このように、フィリピンは英会話の機会が自然発生する場であり、かつ日本人学生にとって話しやすい場と言える。

このような場で、期間中、英会話を繰り返すことは、実践力を身に付けるよいきっかけになるだろうと想像し、機会を多くするように心がけた。3.2 (5) に記した機会は特に高校の教員や生徒と交流できる機会であったが、その他、例えば、単に食事に行く際に HADFAFI のスタッフと会話する様な場面は常にあった。ツアー中、空港を離れてからは、ICAN のスタッフにしか日本人には会っておらず、こちら側にタガログ語を話せる人間はいなかったため、参加者間の会話以外で用いた言語は常に英語であり、英語で会話する機会は狙い通りに多くなった。

4. アンケート調査による教育機会の評価

3章の各節では潜在的な教育機会の所在について記した。記したように、スタディツアーでは、意図しなかった教育機会が自然に表れたり、想定外の出来事が教育機会になったりする。当然、ツアーを企画した教員が、画一的に教育効果や教育機会をまとめることには限界がある。それでも、特定の参加者だけではなく参加者全員に共通した教育機会を把握するために、6名の参加者全員に教育機会の程度をアンケートで尋ねた結果を記す。3章で参加者の発言や筆者の印象に基づいて大まかに示した教育機会について、本章ではその程度を定量的に評価する。

具体的な14の質問内容を以下に記す。

表2 アンケートでの14の質問文

- | |
|---|
| <p>問1. パヤタスを訪問したことは、大気汚染や土壌汚染等の衛生状態への関心を持つきっかけとなったと思うか。</p> <p>問2. パヤタスを訪問したことは、貧困問題への関心を持つきっかけとなったと思うか。</p> <p>問3. パヤタスを訪問したことは、大量廃棄がもたらす廃棄物問題への関心を持つきっかけとなったと思うか。</p> <p>問4. ICAN や HADFAFI との関わりは、NGO 活動の理解の参考になったと思うか。</p> <p>問5. ICAN の日本人スタッフとの出会いは NGO 職員という職の理解の参考になったと思うか。</p> <p>問6. Resiglobo を寄付すること等の関わりは、援助・国際協力のあり方について理解するきっかけとなったと思うか。</p> <p>問7. プレゼンテーションの準備・実施は、廃棄物問題全般への関心を持つきっかけとなったと思うか。</p> <p>問8. プレゼンテーションの準備・実施は、地元の学生との交流のきっかけとなったと思うか。</p> <p>問9. プレゼンテーションの準備・実施は、英語力向上やその動機付けのきっかけとなったと思うか。</p> <p>問10. ホームステイ経験を中心としたフィリピンの生活の理解経験は、アエタ族等のフィリピン人のライフスタイルの理解のきっかけとなったと思うか。</p> <p>問11. ホームステイ経験を中心としたフィリピンの生活の理解経験は、幸せ・豊かさ・経済水準の関係についてのあなたの理解を深めるきっかけとなったと思うか。</p> <p>問12. 豚の屠殺を見学したことは、命の大切さについて考えるきっかけとなったと思うか。</p> <p>問13. 豚の屠殺を見学したことは、食べ物を大切にすることについて考えるきっかけとなったと思うか。</p> <p>問14. フィリピンの人々との触れ合いは英語学習の動機づけになったと思うか。</p> |
|---|

いずれについても

- ①：強く思う
- ②：やや思う
- ③：よくわからない
- ④：あまり思わない
- ⑤：まったく思わない

の5段階で回答をしてもらった。6人の①～⑤の回答結果自体と、それらをそのまま1～5の数値と捉え、それらから求めた平均値と標準偏差を表3に挙げた。

表3 アンケート回答と集計結果

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14
A	1	1	4	1	1	2	1	1	1	1	2	2	2	1
B	1	1	1	1	1	1	2	2	2	1	1	3	1	1
C	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1
D	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
E	1	1	1	1	1	1	2	3	1	1	1	2	1	1
F	1	1	1	1	1	2	2	1	2	1	1	1	1	1
平均値	1.00	1.17	1.50	1.17	1.00	1.50	1.50	1.50	1.33	1.00	1.17	1.67	1.17	1.00
標準偏差	0.00	0.41	1.22	0.41	0.00	0.55	0.55	0.84	0.52	0.00	0.41	0.82	0.41	0.00

問1, 5, 10, 14については全員が①と答えた。つまり、全員が質問に対し強く同意したことを示している。他の問いに関する回答も平均値は全て2より小さく、多くの参加者が、概ね質問内容には強く同意したことを示している。

5. 各教育機会の存在についての考察

ここでは、4章に示したアンケート回答結果を基に、3章で潜在的な教育機会と捉えた項目それぞれが実際にどの程度存在していたかについて考察する。

5.1 バヤタス訪問による廃棄物問題理解の機会

3.1 (1) に記したこの点は多岐にわたるため、問1, 2, 3の3つの問いに分けて質問した。バヤタス訪問で衝撃的なまでに伝わるのは汚染問題であるため、それについて問うた問1へは全員から強い共感が得られた。問1の観点からの教育機会があることは強く示された。

問2は、貧困の象徴として有名なゴミ山で暮らす様に直に接することで、貧困への関心が深ま

る機会となったかどうかを問うものであった。実態としては経済的により困窮しながらゴミ山で暮らすことを選択しない人々がいるように、パヤタスの状況は貧困が一因ではあるものの、教育や住民のいわゆる「課題対処能力」としてのキャパシティーの欠如が原因と言える側面もある。こうした事情を理解・考察することは重要であるものの、問2は、そこまでを問うものではなく、単に直接訪問が貧困問題への関心を持つきっかけとなったかどうかを問うものであった。問2に②と答えた参加者が1名だけいた。個別に確認したところ、「貧困状態は認識しているが、パヤタスの問題は貧困であること以上に貧困から抜け出す発想の欠如やそうした対策としての教育の不足にこそある」という判断のために敢えて②にしたとのことであった。当該回答者は貧困問題への関心を持った上で、既に次の考察段階に入っていたことを意味しており、きっかけを持たせることは重要でなかったと言える。この点を除き、問2の観点からの教育機会があったことは強く示されたと言える。

問3は、3.1(1)に記したような、廃棄物問題の何が特に深刻かを考える機会となったかどうか、そして大量廃棄とのつながりに思い至ったかどうかを問うたものであった。この問いへは1名だけが④、他全員が①と回答した。④とした回答者は「パヤタスに訪問する以前からゴミ問題には関心があったため、廃棄物問題に関心をもつきっかけ」にはならなかったと説明した。このケースを上同様にきっかけが必要でなかったケースであったとして除けば、パヤタス訪問は廃棄物問題への関心を促す機会としてとてもよい教育機会だったと言える。

5.2 パヤタス訪問による NGO 活動や NGO 職の理解の機会

3.1(3)に記したこの点については、それぞれについて問4、5で直接問うた。問4に1名が②と答えた他は全員が①とした。全般に NGO 活動や NGO 職の理解の機会としてはとても有意義であったと言える。ただ、ICANの方と接した時間は数時間であり、かなり限られていた。HADFAFIの活動状況をパワーポイント資料で説明してもらう機会があったが、英語で集中的に行われたために難しかったという事情があった。今回、HADFAFIは他では主にツアーの運営者として関わったために、やはり活動理解は限られていた。3.1(3)に記した NGO 活動や NGO 職の理解の機会は、そもそも最初から強く意図したものではなかったため、問4に1名が②と答えたことは何ら不自然ではない。むしろ、最初から強く意図しなかったにも関わらず、他は全て①という回答であった程教育機会があったことは喜びである。

5.3 オドネル高等学校との文化交流及びワークショップに関連した援助のドナーとしての振舞い方理解の機会

3.2(2)に記したこの点については問6で問うた。3名が②、他は①と回答した。②と回答した一人は、求められたお金を負担しただけのものと捉え②にとどまったということであった。も

う一人は「あまり理解できなかった」ために②としたそうである。最後の一人は「きっかけには十分だった」ものの「援助についての理解に関してはまだ入り口に立ったくらい」で「まだまだ深めていく余地があった」から②にしたとのことである。「まだまだ深めていく余地があった」というのはその通りであり、学習を深めることは望まれる。ただ、問いの文章の「きっかけ」という部分に限れば「十分だった」という回答を得たともいえる。

かなり負担になるような議論をしたため、更なる議論や振り返りに時間をかけることは取って置かなかった。そもそも難しいことを問うているという事情に鑑み、十分な教育機会があったと捉えている。

5.4 オドネル高等学校との文化交流及びワークショップに関連した廃棄物問題理解の機会

3.2 (3) に記したこの点について問7で問うた。3名が②、3名が①と回答した。②と回答した3名のうち1名は、英語でプレゼンテーションするという点、つまり、問9で問うた教育機会が大きすぎて、廃棄物問題へのことを考える余裕がなかったから①にはしなかったようだ。もう一人は、resikglobo をめぐり一連の煩雑なやり取りで気持ちが萎えた事と、先進国と途上国の廃棄物問題の表れ方に大きな差がある事の2点から廃棄物問題全般への関心のきっかけとしては②止まりであったとのことであった。煩雑なやり取りで気持ちが萎えたという点は残念であるが、日本とフィリピンにおいて廃棄物問題の表れ方に違いがあるのは事実であるので、この回答は妥当と言える。最後の一人は、プレゼンの準備・実施の係にはほぼならなかったこととパヤタス訪問こそが廃棄物問題への関心を持つきっかけとなったということで②としたとのことである。

概して十分な機会であったとは言える。

5.5 オドネル高等学校との文化交流及びワークショップに関連した、文化交流、異なる生活様式や価値観理解の機会

3.2 (4) に記したこの点については問8で問うた。6名中1名が③、1名が②、他は①と回答した。寸劇・踊りの披露、ゲームの実施、共同での料理・食事等の一連のイベントの際に、ツアー参加者がフィリピンの生徒と関わる機会は常にあった。それに比べ、プレゼンテーションをしたワークショップは、閉じられた教室内で、定められた枠の中で決まったことをする機会であった。そのため、交流のきっかけはむしろワークショップ前後のイベントにあったというのが③と回答した回答者の理由であった。②と回答した理由は、ワークショップ自体が淡々と進行したためと当該回答者が説明していた。この回答者も前後のイベントでは主体的かつ積極的に相手方の生徒と交流していたためそちらとの差がこのように表現されたのだと解釈している。前後のイベントは相手方が企画してくれた場であったため、文化交流他の機会としての問いはワークショップの場面に限って問うた。全般に十分な機会と評価されたと言え、かつ、それ以上に、前後のイベン

トがより良い機会であったと言える。

5.6 オドネル高等学校との文化交流及びワークショップに関連した、コミュニケーションと英語利用の機会

3.2 (5) に記したこの点については問9で問うた。6名中2名が②、他は①と回答した。②と回答した一人は、比較的易しい単語を使ったこと、機会がたった一度であったことから①とまではしなかったと説明している。もう一人は、プレゼンの準備・実施担当ではなかったため、②止まりであったようだ。その学生に十分な機会がなかった以上①でなかったのはやむを得なく、妥当な回答である。

概して十分な機会であったと言える。

5.7 異なる生活様式、生活水準、価値観理解の機会

次に、アエタ族の村でのホームステイに関連し、3.3 (1) に記したこの点について問10と11で問うた。また、3.1 (2) に記したことは、場所が異なるものの3.3 (1) に記したことと趣旨が同一であり、アンケートの問いも、問11にまとめたため、ここでまとめて論じている。

この二つの問いには、問11に②と答えた回答者が1名いた他は全て①と回答された。問11に②と答えた回答者は、「滞在したのはたった1日で、しかもお祭りの日であったため、彼らの生活を理解するまでには至らなかった」としている。冷静な感想であるが、この問いがきっかけを問うたものに過ぎなかったという意味では、概してこれらの機会は十分あったとも言える。

5.8 アエタ族の村でのホームステイに関連した、豚の屠殺見学における食育の機会

3.3 (2) に記したこの点については問12と13で問うた。問12では2名が②、1名が③、他は①と回答した。問13では1名が②、他は①と回答した。問12に③と回答した1名は、「残酷な殺しかたで、可哀想という気持ちが一番」だったそうで、命の大切さについて考えるきっかけとしては①とまでは言えなかったそうである。②と答えた1名は映像視聴ながら事前に類似の経験があったことと、「アエタの文化を学んで異文化に触れた感動の方が大きかった」という事情があったため②としたそうである。もう1名は、「食事をすることは命を頂いているということだと理解」していたため、②としたそうである。この回答者は同じ理由で問13に②と答えている。これら2名の学生は設定した目的にもともと達していたために、単なるきっかけとしてのこの機会は重要でなかったと言える。ツアーの内容を検討した段階で、参加予定者の希望との調整をしたが不十分だったかもしれない。一方で③と回答した学生にはもっとこうした機会が必要とも言える。参加者のばらつき故にやむを得ない部分かもしれない。③と答えたような学生を相手にしてこの点についての教育に力を入れるなら、豚の屠殺見学後に振り返ったり、議論したりする場面が重要

そうである。

それでも、概して十分な機会があったとは言える。

5.9 フィリピンの人との触れ合い全般における英語学習の機会

3.4に記したこの点については問14で問うた。全員が①と回答したため、この点についてはとても良い機会であったと言える。この問いは問9とやや重複したが、ツアー全体の英語学習の機会について改めて問い、その機会が確認されたと言える。

6. おわりに

問題の理解には当事者性を持つことが重要である。異なるライフスタイルを理解するには実体験が重要である。教科書に基づくいわゆる座学が、こうした目的に絶対的に不十分であるとは言わないが、スタディツアーでは、こうした目的に向けた効果的な教育ができることが示された。筆者のこれまでの教育経験からも、問題の悲惨さを伝える時には映像資料を用いた教育が文字や言葉だけによる教育よりも効果的であった。さらに踏み込んで、経験型のスタディツアーで五感をフルに働かせることには高い教育効果があると、少なくとも本論で論じた文脈では示された。

冒頭にも記したように、このツアーの大まかな目的は「映像や教科書からは実感を持ってない途上国の現状を直接感じ、問題意識を醸成する」という点にあった。この点は、概ね達成されたといえる。また、それ以上に掘り下げたり、具体的な調査をしたりすることまでは事前に想定していなかったという観点からも当初の目的は達成できたと言える。

一方で、筆者が想定しなかった教育機会も少なくなく存在した。例えば、偶然に遭遇したフィリピンの方の親切に参加者が感動し、物質的豊かさよりも精神的豊かさが重要であることに気付いたような場面があったことが挙げられる。偶然起こったことがそのきっかけとなったことは想定外の収穫であった。教室ではなく現場で様々な人と関わるスタディツアーには、このような教育機会も潜んでいる。

スタディツアーには他の作用もあった。一つは同行した教員による教育機会が常時あったことである。現地に滞在した8日間、偶然の出来事を含む様々なことについて学生と密接に関わり専門的に解説する時間があったことは教室では得難い経験であった。もう一つは満足度の高い旅行にできたということである。観光旅行で頻繁に海外を訪れるという参加者も、他ではできなかった高い満足感があったと伝えてくれた。嗜好が多様化している現在、学ぶことから満足感を得ようという嗜好を持つ人も増えつつある。スタディツアーには、教育機会としての側面だけではなく、高い満足を得るための旅行の一形態としての側面もあり、こうしたニーズに応える機会とも捉えられる。

更に、次年度のツアー参加希望者が出ていること、フィリピン留学を計画し始めた参加者がいること、フィリピンへの再訪問を強く希望する参加者がいること、卒論のテーマをフィリピン、貧困、国際協力関連にしようとする傾向がツアーに参加した学生はもちろんなかった学生にまで一出始めていること等も、ツアーの想定以上の成果と言える。

最後に、振り返りの場での参加者の言葉から印象的だったものを紹介して、他の教育機会についての補足とする。「フィリピンへの1週間のツアーは、オーストラリアへの4カ月の留学をはるかに超えるくらい有意義だった」、「ニュースで社会問題を見聞きした際に、以前に比べ当事者性を持って深刻に捉えることができるようになった」、「途上国の深刻な状況を本当に現実のことだと実感できた」、「他の学生と話していて、社会問題への関心の度合いについて温度差を感じるようになった」、「人生に最も大きな影響を与えたイベントだった」、「途上国の実態の、ステレオタイプに語られるイメージとのズレがあることを理解できた」。これらはツアー終了3か月後の感想である。まだ言語化できていない様な効果が参加者の中でこれからも具体的に醸成されていく可能性を強く感じている。

本学部で、このようなスタディツアーの機会が増え、より発展していけば幸いである。

謝辞：このスタディツアーの実施にあたっては、企画や下見段階からベルコヴィッツ・メリサンダ先生に大変お世話になった。ツアーの成功は主に先生のご助力に負うものであり、この成果も先生との共同のものである。単に文責という観点から本文を筆者の単著としていることをここに記す。また、参加した学生の小林彩華さん、鈴木優里さん、田嶋佑奈さん、ダンス瞳さん、戸田萌子さん、中塚千和さんにも企画段階、ツアー中、そしてツアー後のアンケートで大変お世話になった。更に、ツアーの実施にあたってはICAN, HADFAFI, オドネル高等学校それぞれの関係者、ホームステイを受け入れてくれたアエタ族の人々、中京大学の関連部局の方々にもお世話になった。ここに記して謝辞を表す。

